The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	歴史的観光地における視覚障がい者の観光行動特性を踏まえた支援方法に関する研究
Author(s)	石塚, 裕子
Citation	大阪大学, 2012, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/59246
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【152】

氏　　名	石　塚　裕　子（いし　づか　ゆう　こ）
博士の専攻分野の名称	博　士（工学）
学　位　記　番　号	第　２５５４３　号
学位授与年月日	平成 24 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 工学研究科地球総合工学専攻
学　位　論　文　名	**歴史的観光地における視覚障がい者の観光行動特性を踏まえた支援方法に関する研究**
論文審査委員	（主査） 教　授　新田　保次 （副査） 教　授　西田　修三　　准教授　飯田　克弘　　准教授　松村　暢彦

論文内容の要旨

本研究は，社会的ニーズの高まりから近年，様々な取り組みや研究が盛んになっている観光バリアフリー分野において既往研究が少なく，我が国の代表的な観光地であり「見る」ことが中心の歴史的観光地において，最も障壁が多いと想定される視覚障がい者を対象に，観光行動へのニーズを分析し，ニーズが顕在化していない移動を伴った観光行動への支援の考え方ならびに支援方法について提案することを目的とした．

第1章では，本研究の背景，目的，構成を示した．

第2章では，視覚障がい者の観光の活動状況について，健常者と比較する形で分析を行った．その結果，情報の入手手段や利用する交通機関などに視覚障がい者と健常者の間に差異が認められたが，宿泊旅行を行う回数や観光地での行動経験には有意な差はなく，視覚障がい者は健常者と同様に観光を行っていることを確認した．

第3章では，視覚障がい者が観光することを思い立ち観光地において観光行動を実行するまでの過程において，どの段階でどのような制約や困難を感じているのかについて健常者と比較する形で分析を行った．その結果，制約や困難を感じやすい段階については，視覚障がい者と健常者では差異はないが，制約や困難を感じる理由について，差異があることが明らかになった．視覚障がい者は，訪問地に到着してから観光行動を実行する段階において，特に移動手段を確保することに制約を感じていることが明らかになった．

第4章では，前章までの結果から視覚障がい者固有の課題を有している可能性がある訪問地での自立的な観光行動について，ニーズに関するアンケート調査を行った．その結果，自立的な観光行動ニーズは，視覚機能の有無ではなく，移動を伴うか否か，過去の経験の有無がニーズの表明に影響していることが明らかになり，街並み散策といった移動を伴う観光行動のニーズが潜在化していることが確認された．

第5章では，移動を伴う観光行動へのニーズについて，自己効力感の概念を援用した移動に対する意識分析から解釈を行い，支援の考え方を提案した．移動を伴う観光行動の支援は，移動のための支援に加えて，訪問先の魅力を体得するための支援が必要であることを示し，支援にあたっては，①支援対象者の移動能力，②当事者自身の能力で達成できたと感じること（達成経験），③視覚障がい者の観光行動に関する情報提供（代理的経験），④周囲の人の対応及び反応（達成経験に影響与える要素）の４点を考慮することを提案した．また，移動能力別に支援の考え方を提示し，支援を考える上での考慮すべき事項の整理を行った．

第6章では，移動を伴う観光行動に対する支援方法の一例として観光ガイドを伴った散策について実証的研究を行い，第5章で提案した支援の考え方に基づき，評価指標を設けて効果の評価を行った．その結果，結果予期については明らかな効果が確認されたが，自己効力感の向上については，移動能力別に効果が異なり，移動能力に応じた改善が必要であることが確認された．

以上の結果から，歴史的観光地における視覚障がい者の移動を伴った観光行動へのニーズを顕在化させるには，移動能力と観光行動に対する意識を考慮した適切なサービスが必要であることを明らかにした．観光は生活の質を確保する上で必要な機会であることは明らかであるが，通院や日用品の買い物といった生活に絶対不可欠な活動とは異なり，当事者のニーズが顕在化しないと活動の機会すら失われる可能性がある．本研究の結果を用いて，既存の支援方法について見直し，改善し，評価することで，視覚障がい者の観光行動へのニーズを顕在化させる必要があること，新たな支援方法の開発及び共用化をはかることが視覚障がい者の観光行動の多様化，拡大化に寄与すること，そしてなによりも観光地において迎える者の態度，対応が変化することが，視覚障がい者の観光行動への自己効力感を向上させ，活動機会の確保につながることを本研究では提案した．

論文審査の結果の要旨

本研究は，社会的ニーズの高まりから近年，様々な取り組みや研究が盛んになっている観光バリアフリー分野において，「見る」ことが中心の我が国の代表的な歴史的観光地において，最も障壁が多いと想定される視覚障がい者を対象に観光行動へのニーズの構造を分析し，そのニーズへの対応策の例として「観光ガイドを伴った散策」を取り上げその効果を明らかにすることを目的としている．このような研究は極めて既往研究が少なく新規性が高いといえる．

観光の活動状況の特性把握では，観光の活動状況に関するアンケート調査を実施し，既往調査の健常者データとの比較分析を行っている．その結果，視覚障がい者は健常者と宿泊旅行回数など差異がなく観光を行っていること，その一方で視覚障がい者の観光の特性として，移動の交通手段や情報の入手手段に健常者と違いがあることを明らかにしている．

観光の意思決定過程に関する特性分析では，観光を思い立ち，観光行動を実行するまでの意思決定過程において，制約を感じる段階と制約を感じる理由についてアンケート調査により調べている．その結果，制約を感じる段階については視覚障がい者と健常者との差異は確認されないが，制約を感じる理由が異なることを明らかにしている．視覚障がい者は，特に移動手段を確保することに制約を感じている．

歴史的観光地内における観光行動のニーズ分析では，視覚障がい者固有の課題と考えられる観光地内での行動について，ニーズに関するアンケート調査を行っている．その結果，行動ニーズは視覚機能の有無ではなく，移動を伴うか否か，過去の経験の有無が行動ニーズに影響していることが明らかになっている．

移動に対する自己効力感と支援では，自立的な行動ニーズが潜在化している「移動を伴う観光行動」について，移動に対する意識構造から解釈を行い，その支援の考え方について提案している．「ニーズはあるが，諦めてしまっている人」には，散策などを実際に体験するという達成経験が効果的であり，その体験を支援する周囲の人の対応やサービスの内容が達成経験の質を左右することを示している．一方，「ニーズそのものがない人」に対しては，移動を伴う観光行動がどのような結果を得られるかということを伝えていくことの必要性を指摘している．

観光ガイドを伴った散策の効果については，結果予期（観光行動による得られるもの）と自己効力感の向上について，前者を推薦意図，後者を行動意図という評価指標を設けて測定した結果，結果予期については明らかな効果が確認されている．一方，自己効力感の向上については，移動能力別に効果が異なり，移動能力に応じた改善が必要であることを明らかにしている．

以上の結果から，歴史的観光地における視覚障がい者の観光行動の多様化，拡大化を図るためには，視覚障がい者の観光行動に対する意識，自己効力感のレベルに応じた適切な対応が必要であり，特に歩行能力の高い視覚障がい者が達成感を感じる観光地づくりを行うことが，他の視覚障がい者にとって代理的経験となり，移動を伴う観光行動といったリスクを伴う観光を行ってみたい，行ってみよう，自分もできるのではないかといった意識を高揚させる原点になることを本研究では示しているといえる．

以上のように，本論文は歴史的観光地における障がい者を対象にした行動支援分野における研究として，学術的に新規性があるとともに，社会的に有用性が高く，今後発展が期待される研究と評価できる．特に，視覚障がい者の観光行動特性を意思決定過程把握とニーズ分析，自己効力感と支援方法，そして観光ガイドを伴った散策効果の視点から捉え

ている点は高く評価できる.

よって本論文は博士論文として価値あるものと認める.